

若山牧水全集

第七

若山牧水全集

雄
鷄
社
刊

若山牧水全集 第七卷

昭和三十三年十二月三十日發行

著者若山牧水發行者武内俊三印刷
者草刈親雄印刷製本所東京都新宿
區市ヶ谷臺町一番地中央精版印刷
株式會社發行所東京都中央區日本
橋江戸橋一丁目七番地株式會社雄
鷄社電話千代田(27)二七九一・二番
振替東京二六二五五番

定價六〇〇圓

編集・校訂

若山喜志子
大悟法利雄

落丁、亂丁の際は
お取換えいたします。

目次

樹木とその葉

草鞋の話旅の話	七
島 三 題	三
木 槿 の 花	五四
夏を愛する言葉	六五
四邊の山より富士を仰ぐ記	七二
野 蒜 の 花	八四
若葉の頃と旅	一〇四
枯 野 の 旅	一二四

冷たきよわが身を包め……………	一三〇
夏の寂寥……………	一三三
夏のよろこび……………	一三八
釣……………	一三〇
蛇と蟻と蟬と……………	一三四
空想と願望……………	一三八
酒の讃と苦笑……………	一四〇
歌と宗教……………	一五三
自己を感じる時……………	一五五
なまけ者と雨……………	一五九
貧乏首尾無し……………	一六二
若葉の山に啼く鳥……………	一六八

秋風の音	一七三
梅の花櫻の花	一七四
温泉宿の庭	一八〇
或る日の晝餐	一八三
桃の實	一八九
春の二三日	一九五
青年僧と叡山の老爺	二〇六
東京の郊外を思ふ	二一八
駿河灣一帶の風光	二三三
故郷の正月	二三五
伊豆西海岸の湯	二三九
海邊八月	二四六

地震日記……………二四七

火山をめぐる温泉……………二六二

自然の息自然の聲……………二六八

補遺

裾野より……………二〇八

故郷より……………二一〇

閑乎忙乎……………二二三

津輕の友に寄する手紙……………二二四

鷹……………二二二

浦賀港……………二二四

「白雪」の話……………二二八

旅から歸って……………	三四一
移り變り住む場所の話……………	三四七
お祖師様詣り……………	三五四
暴風雨の夜……………	三六五
或る歌の友に寄する手紙……………	三七一
昨日 今日……………	三八三
白雲山……………	三九二
羽後酒田港……………	三九五
酒と小鳥……………	四〇四
古驛……………	四〇八
秋草の原……………	四一四
旅と繪葉書……………	四二九

夏の言葉……………四三六

雲の峰……………四四四

廿三夜……………四四七

上京記……………四五〇

姉への手紙……………四六〇

秋草と蟲の音……………四七四

解説……………大悟法利雄……………四八三

第七卷

紀行・隨筆三

樹木とその葉

序文に代へてうたへる歌十首

著

者

書くとなく書きてたまりし文章を一冊にする
時し到りぬ

おほくこれたのまれて書きし文章にほのかに
己が心動きをる

真心のこもらぬにあらず金に代ふる見えぬに
あらずわが文章に

幼く且つ拙しとおもふわが文^{ぶん}を讀み選みつ
捨てられぬかも

自^しがこころ寂び古びなばこのごときをさなき
文はまた書かざらむ

書きながら^{ひら}腕をちぢめしわがすがたわが文章
になしといはなくに

ちひさきは小さきままに伸びて張れる木^この葉^は
のすがたわが文にあれよ

おのづから湧き出づる水の姿ならず木々の雫
にかわが文章は

山にあらず海にあらずただ谷の石のあひをゆ
く水かわが文章は

書きおきしは書かざりしにまさる一冊にま
めおくおかざるにまさるべからむ

草鞋の話 旅の話

私は草鞋わらじを愛する、あの、枯れた藁わらで、柔かにまた巧みに、作られた草鞋を。

あの草鞋を程よく兩足に穿はきしめて大地の上に立つと、急に五體の締まるのを感じる。身體の重みをしつかりと地の上に感じ、其處から發した筋肉の動きがまた實に快く四肢五體に傳はつてゆくのを覺ゆる。

呼吸は安らかに、やがて手足は順序よく動き出す。そして自分の身體のために動かされた四邊あたりの空氣が、いかにも心地よく自分の身體に觸れて來る。

机上の爲事しごとに勞れた時、世間のいざこざの煩わづらはしさに耐へきれなくなつた時、私はよく用もないのに草鞋を穿いて見る。

二三度土を踏みしめてゐると、急に新しい血が身體に湧いて、其儘そのまま玄關を出かけてゆく。實は、さうするまではよそに出懸けてゆくにも億劫おくくまなほど、疲れ果てゝゐた時なのである。

そして二里なり三里なりの道をせつせと歩いて來ると、もう玄關口から子供の名を呼び立てるほど元氣になつてゐるのが常だ。

身體をこごめて、よく足に合ふ様に紐ひもの具合を考へながら結ぶ時の新しい草鞋の味も忘れられない。足袋を通してしつくりと足の甲を締めつけるあの心持、立ち上つた時、じんなりと土から受取る時のあの心持。

と同時に、よく自分の足に馴れて來て、穿いてゐるのだからぬいのか解らぬほどになつた時の古びた草鞋も難あがた有い。實をいふと、さうなつた時が最も足を痛めず、身體を勞れしめぬ時なのである。

ところが、私はその程度を越すことが屢々しばしばある。いゝ草鞋だ、捨てるのが惜しい、と思ふと、二日も三日も、時とすると四五日にかけて一足の草鞋を穿かうとする。そして間々まゝ足を痛める。もうさうなるとよほどよく出來たものでも、何處にか破れが出來てゐるのだ。従つて足に無理がゆくのである。

さうなつた草鞋を捨てる時がまたあはれである。いかにも此處まで道づれになつて來た友人にでも別れる様なうら淋しい離別の心が湧く。

『では、左様なら!』